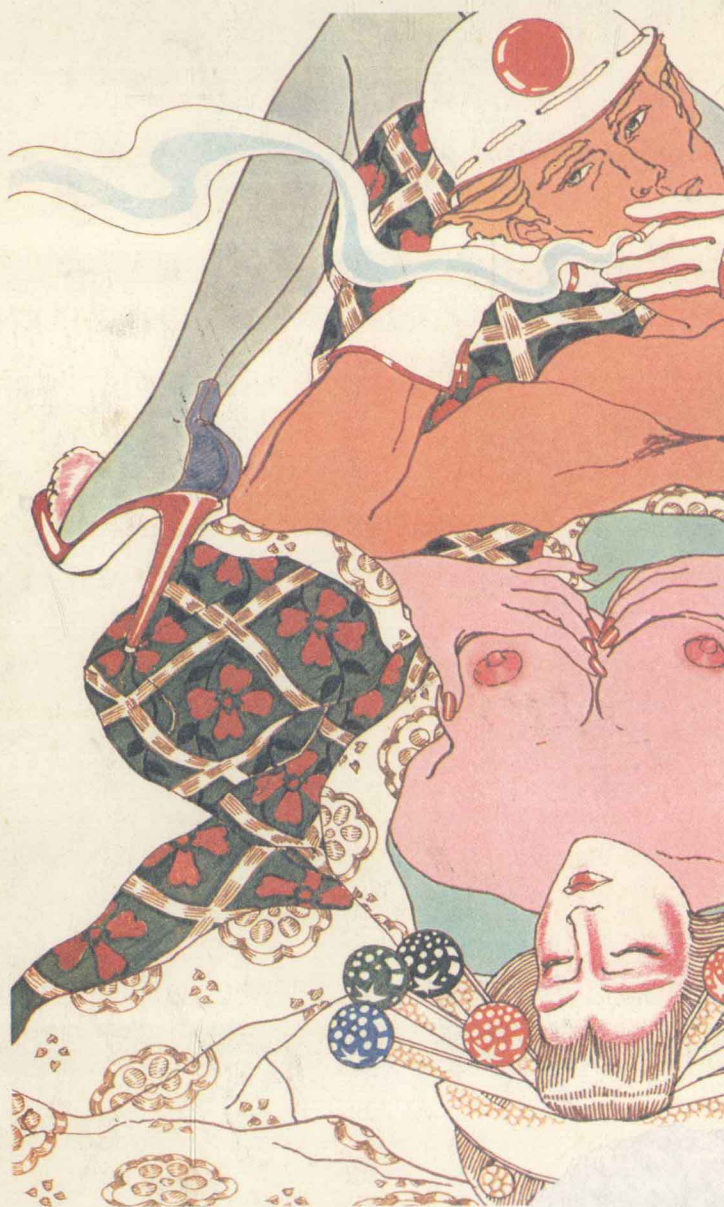


裏声で歌へ君が代

丸谷才一



谷才

裏声で
歌へ
君が代



うらごゑ うた きみ よ
裏声で歌へ君が代



●著者 まる や さいいち 丸谷才一 ●発行者 佐藤亮一
●印刷所 二光印刷株式会社 ●製本 新
宿加藤製本 ●発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町 71 番地
郵便番号 162 振替東京 4-808 番
電話 業務部 (03) 266-5111, 編集部 266-5411
昭和57年 8月20日印刷 昭和57年 8月25日発行

定価 1900円

© Saiichi Maruya, Printed in Japan 1982

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

裏声で歌へ君が代

装幀と国旗デザイン／和田 誠
装画／アントニオ・ロペス

1

秋も終りに近い日の午後五時だから外はもう宵闇だが、地下鉄の駅のなかには螢光燈の白い光で偏平に染められてゐて、どこにも影はない。これから五分か十分たつと、帰りを急ぐ人々でごつたがへすはずなのに、今はまだ、プラットフォームもそれから急勾配の長いエスカレーターも、わりあひすいてゐた。歩いて昇り降りする階段はない。何しろ川の流れてゑぐられた深い谷のすぐそばにある駅なので、線路が川の下をくぐるせいとか、プラットフォームは地の底に横たはつてゐて、電車から降りた客が空の下に立つまでには、五十度近い傾斜で六十メートルもつづくエスカレーターに運ばなければならないのである。下から振り仰いで、左の二つが上り、右の二つが下り、全部エスカレーターばかり。動く金属の坂が四つ、整然と並んでゐる。

その左はしのエスカレーターで男がひとり昇つてゆく。手には何も持つてゐないし、どちらの手も手すりをつかまへてゐない。年恰好は初老と言つてもいいし、中年と言つてもよからう。これは一つには、今の日本では、この男がまだ子供だつたころにくらべて中年の範囲が広がつたせいだし、それに彼が、黒い髪がふさふさしてゐて、年よりはずつと若く見えるからである。いささか中年ぶ

とりの気味はあるが、まあ中肉中背といふところか。ひげは生やしてゐない。顔立ちは美男でも醜男でもなくごく普通のところで、ただし生き生きとした精悍な感じと照れくさうなほにかんだ感じとがいろいろまじつて、入り組んだ効果をあげてゐる。それは時によつて、ひどく人なつつかつたり、づうづうしい印象を与へたりする顔だが、今は何か落莫とした風情で、口をへの字に結んでゐる。外套はもちろんレインコートも着てゐない。緑つばい替上衣に茶いろいシャツで、灰いろのズボン。ネクタイはなし。商売柄、服装にはわりに氣を使つてゐて、当人としては画家と会社員のちようど中間くらゐを狙つてゐるつもりだが、はたから見ると画家のほうにすこし寄つてゐるかもしれない。彼は梨田雄吉といふ画商なのである。

中年の画商は、二つのエスカレーターでなめらかに降りてゆく人々を、無表情と不機嫌のちようど中間くらゐの顔で見るともなしに見ながら、上へ昇つてゆく。彼の前には五メートルばかり誰もゐないし、すぐ右の上りも同じやうに人影がまばらだが、その向うを流れ降りる二つのエスカレーターには三四段おきに、時にはもつと離れて、一人づつ、あるいはごくまれに二人ならんで立つ人々が、彼のほうへ近づき、彼とすれ違ひ、そしてすぐに別れて、すべり降りてゆく。買物婦りの主婦、白人の男、黒ずんだレインコートを着て上から下までボタンを全部きちんとかけてゐる老人、会社員、何国人かわからない少年、白人の女、ジャンパーの若者、女学生二人、会社員。

あと十五メートルばかりで上に着かうといふころ、梨田の顔が急に明るくなつた。一つ置いて隣のエスカレーターで降りて来る若い女を見かけたからである。女は銀いろがかつた灰いろのワンピースに葡萄酒いろのカディガンを羽織つてゐる。整つた白い顔で眼が大きく、賢さうなのに、一刷毛あはくはいたやうな寂しい雰囲氣がある。その寂しさは、かういふ場所で一人でエスカレーターに乗つてゐるときに誰でも陥りやすい一種の放心状態のせいといふより強められてゐた。梨田

は白い顔をじつとみつめ、このあひだ小さな編物の店に版画を納めに行つたとき紹介された女に間違ひないと考へ、しかしあのときの女の愛想のいい、愛嬌のある、おだやかな様子とはどうも違ふ、ひよつとするとあの女は妹でこれは姉かもしれないし、あるいはまつたくの他人かもしれないと怪しみ、もし人違ひだつたら謝るまでだと咄嗟に肚をきめて、大きな声で呼びかけた。

「朝子さん、朝子さん」

朝子はまづ自分に呼びかけた男がどこにゐるのかとあわてて探し（さうしてゐるうちに一メートルくらゐ降りてゆくし、男のほうも同じだけ寄つてゆく）、次いで、手をひらひらさせて嬉しさうにしてゐる男が誰なのかと一瞬とまどひ（そこでまたかなりの距離が縮まる）、しかしすぐに微笑を浮べて、

「あ、このあひだはどうも」と挨拶した。

「やあ、やあ。お元気ですか」

「はい」

「帰るところ？」

「はい」

ちようどこのあたりで二人はすれ違ひ、上と下に別れるはずだった。朝子はそのつもりで微笑をつづけながら軽く会釈する。

しかし梨田はこのときすばやく振返つて、下を見おろし、自分の乗つてゐるエスカレーターに人影がまばらなのを確かめると、激しく身をねぢつて向き直り、大変な急勾配の坂、絶え間なく昇つて来る金属の階段を、小走りにそして事もなげに降りて行つたのだ。朝子が小さく何か叫んだが、意

に介さない。彼の身のこなしは敏捷で、足どりは至つて軽やかだし、手すりには相変らずつかまらうとしない。

十段はかり下に乗つてゐた若者が、呆氣^{あつけ}に取られて身を片側に寄せると、画商は、

「ありがたう」

と叫んだ。その三段下にゐた、大きな紙袋を下げてゐる白髪のお婆は不機嫌に睨みつけたが、彼が、

「どうも、どうも」

と愛想よく声をかけたので、やむを得ず若者とは反対の側に、しかし睨みながら寄ることになり、梨田は右手を胸のあたりに軽くかざして謝意を表し、通り抜けた。そのすこしさきには、三人づれの会社員が一段づつ別の段に乗つてゐて、

「何だ、この人」

「これはないよ」

「ないよな」

などどつぶやいたが、梨田は陽気な声で謝りながらすり抜ける。四つのエスカレーターの全乗客のうちほぼ半数の（あるいはもつと多くの）視線を浴びながら、この調子で数十メートルを降りて行つた彼は、朝子よりもさきにプラットフォームに立つて、一つ置いて隣のエスカレーターの降り口でにやにやしながら、しかしさすがにすこし息をはずませて待つてゐる。そこへ、上気した顔の若い女がゆるゆると近づいて行つた。

朝子がまづ言つたのは、

「無鉄砲ねえ」

といふ台詞であつた。彼女はそれを、咎めるといふよりはむしろ嘆くやうな口調で言つた。二人のあひだの気持のへだたりは、今の出来事のせいで一気に縮まつてゐる。

梨田が三村朝子と知りあひになつたのは、つい一昨日のことだつた。小さな編物の店に版画を届けに行つたら、この店にしてはずいぶん若い客が手編みのワンピースを注文に来てゐて、その女に彼が露骨に関心を示し、ぜひ紹介してもらひたいと女主人に頼んだのである。紹介と言つてもごくあつさりしたものだつたが、絵の話やファッションの話の合間合間に彼のほうからいろいろ訊ねた末、カメラ会社に勤めてゐたのがその技術のほうの社員と結婚して退職し、夫に先立たれたので元の会社の嘱託になつたといふことがわかつた。画商は、未亡人と聞くと、さう言へばばくも独身だつた、とおどけた声で言ひ、二人の女を苦笑させたのだが、女主人がほんのすこし意地悪な、しかし充分に社交的な口調で、梨田さんはヨーロッパふうでいらつしやるから、と批評したのは、表面はしよつちゆうヨーロッパへゆくことを踏まへてだけれど、むしろイタリアふう、つまり女に手が早いといふ意味なのだらう。が、画商はいつこうひるまずに、ちようど車で来てゐるからお送りすると誘つて断られ、それでは今度、電話をかけませうと言つて別れた、ただそれだけの仲だつたのである。それゆゑ彼女のつぶやいた短い言葉は、エスカレーターを反対に降りたことを咎めるだけではなく、自分に対するなれなれしさをも責めてゐたのだらう。

しかし梨田は、

「さう、無鉄砲」

と鸚鵡おうひがへしに言つて大きくうなづき、人々の邪魔にならないやう、降り口から離れ、売店のほうへ歩いてゆく。そして朝子がついて来たのを確めてから、

「無鉄砲……。何度も言はれました。ばくが今まで一番たくさん言はれた人物評論は、それかもし

れません」

「やはり、さう？」

「うん。たいていの人と言つたな、いろんなとき」

その口ぶりは、彼らの見当違ひな批評が自分にはどうしても納得できないといふふうである。くすりと笑つてから、朝子が訊ねた。

「たとへば？」

「さうですね、たとへば画商をはじめるとき。銀行をやめるとき。それから陸軍の学校をやめるときも。まあ、いつでも判を押したやうに、無鉄砲だと言つて叱られるんだけど。一番はじめはいつだらう？ あのとときかな？」

と画商はまるで自分の生涯を見わたすやうな目つきになつて、ほんのすこし首をかしげる。

「あのとときつて？」

「中学の一年生のとき。剣道の教師を卒倒させましてね、蛇のせいで」

「卒倒したんですの？」

「いや、させたんです」

「まあ」

と女は笑つたが、どうやら「蛇のせいで」といふところは聞きもらしたらしく、

「剣道で？ まさか」

「そんなことできやしない。蛇なんですよ」

「蛇？ あの長い……」

「ええ、これくらゐ」

男は両手を八十センチくらゐにひろげた。

それはかういふことだつた。剣道の教師でむやみに忠君愛国を説く脂ぎつた四十男がゐるが、これが梨田の隣りの家の、亭主が上海事変で戦死した後家と以前から親しくしてゐて、ときどき通つて来る。そのことがいくぶん自慢だつたのだらう、それとも惚気のりけの一種かもしれない、あるとき隣りの主婦が梨田の家の茶の間で、あの先生に教はつてゐるかと思ね、このあひだおつしやつてゐたけれど、あんな大男なのに蛇を見ると身の毛がよだつんですつて、と言つたのだ。おそらく寝物語に聞いた話なのだらう。隣りの女が帰つてから、母親は梨田に、さっきのことは誰にも言つてはいけないと、こはい顔で口どめした。梨田は思想と男女関係との矛盾についてはこのころからわりあひ寛大なちだつたから、そんなことくらゐわかつてゐる、と大人ぶつた口調で答へたが、数日後、自習の時間に教室から抜け出して、校庭のはづれを流れる小川のはとりで寝ころんでゐると、同級生が一人、小さな青大将を枯枝にからませて持つて来た。蛇はぐつたりしてゐるが、それでもつつかれるとうるささうにして紅い舌を出す。梨田はそれをおもちやにして遊んでゐるうちに、ふと、しかしあの先生が本当に蛇が嫌ひなのだらうか、自分は平氣なのに、あの剣道の達人（五段）がこんなものをこはがるなんてあり得ない気がする、と思つた。それは何か世界の謎を相手どつてゐるやうな、不思議で不思議で仕方がない感じだつたが、そのうちにとつぜん、それなら試してみればいい、といふ考へが浮んで、もう矢も盾たてもたまらなくなり、梨田は剣道場へ走つて行つた。ちやうどベルが鳴つて、学校全体がざはざと騒しくなる。校舎から出て来た生徒たちが、青大将を持つて走つて来る彼を見て、はやしたてたり、露骨な軽蔑の目つきをしたりするので、まるで自分が他人には意義のわからない真理の探求のためかうして駆けてゐるやうに興奮して来る。梨田が道場の入口へはいらうとしたとき、稽古着に袴の剣道教師が、黒い漆塗りの胴をつけたままで悠然と出て

来たので、「ほら、先生」と枯枝を差出したところ、蛇が枝からはづれてコンクリートの上にころげ落ちた。梨田は笑ひかけた。彼としては枯枝ごと渡すつもりだったのに、さうはゆかなかつたことが、まるで計画が齟齬^{そご}を来したやうに感じられて、ひどくをかしかったのである。しかし驚いたことに、いかめしい黒胴をつけた剣道教師は、笛のやうに哀れな声を出して、妙にゆつくりと尻餅をついた。腰を抜かしたのである。

道場の神聖をけがしたといふ理由で剣道教師は停学三日を主張したが、学級主任の博物の教師がしきりにとりなしてくれて、譴責^{けんせき}、つまり校長室でちよつと叱られて放免になつた。梨田は自分がかばふといふよりは母親との約束を守る気持のせいで、剣道教師が蛇嫌ひだと知つてゐたことをおくびにも出さず、ただ、蛇をもらつたので誰か先生に見せたいと思つた、と言ひ張つた。そして博物の教師はかねがね剣道教師とソリが合はなかつたらしい。ただし梨田は半月ほど経つてから、剣道の時間にチャンバラ映画の真似をしてゐるところをみつかつて、稽古に名を借りた、ひどいいちめ方をされたけれど。

「ひどいいちめ方つて？」

と朝子が訊ねた。

「ほかの生徒がみんな坐つて見てゐる前で、剣道教師とぼくの一対一の稽古。つまりリンチですわね。倒れても倒れても向つてゆかなくちやならないし、倒れて息をついてゐると、竹刀でぶたれたり、蹴られたり……」

「……」

朝子が、聞くだけでも辛いといふ感じで顔をしかめた。

「結局、柔道の教師が上手にとめてくれたからよかったけれど、あれがなければ半殺しになるとこ

ろだった」

「くやしかったでせう？」

「それはくやしい。でもね、さんざんひつばたかれながら、キナくさい面のなかで思つてゐた。蛇がありさへすればなあつて」

朝子が泣き笑ひの顔になったとき、梨田はだしぬけに、

「うまいフランス料理屋があるんですよ。値段も安い。ゆきませう」

と誘つた。女は、

「これから？」

と驚いてから、

「でも、こんな服でいいかしら」

と答へたが、これはすでにゆく気があることの表明だった。男が一押し二押しすると、女は断ることができない。かうして二人は、もうラッシュ・アワーがはじまつてさつきとは打つて變つて混雑してゐるエスカレーターに、並んで乗ることになる。彼らは、黙りこんでゐる老夫婦と、麻雀の話に夢中の会社員二人とのあひだに立つて、上へ上へと昇つてゆく。

しかし梨田は改札口を出ると、歩きながら、

「うん、さうだった」

とつぶやいて、それから、さすがにすこしバツが悪さうな顔で、

「食事の前に一つ寄るところがありました。顔を出して、それからレストランへゆきませう。十分ばかりつきあつて下さい。ちよつとした会なんです」

「どういふ会ですか？」

と朝子が訊ねたのは当然のこと、いはば彼女はエスカレーターの件と蛇の話で打ちとけたその分だけかへつて逆に用心しようとしてゐる様子だった。だから、もし梨田が中途はんばに突飛なことを言つたなら、ついてゆくことを断つたに相違ない。しかし画商の返事は意表を衝いてゐた。

「なに、大統領の就任パーティーですよ」

と平気な顔で言つたのである。

「あの……」

と朝子がまじめな顔でためらつてから、意を決したやうに、

「アメリカの？」

と半信半疑で、といふよりはむしろ笑はうと努めながら言つたのに、画商も、これはこだはりなく笑つて、

「いや、これは説明が足りなかつたな。アメリカぢやありません。台湾。といつても飛行機に乗るんぢやなくて、もちろん東京。近所なんです。台湾の、まあ亡命政権といふのかな、台湾民主共和国準備政府。それが東京にあつて、ぼくの友達の台湾人が、その大統領に今度なりましてね」

「まあ」

「つまり彼らは、蒋介石、今はその息子の蔣経国ですが、この政府が日本の敗戦後、中国本土からはいつて来て、台湾を支配してゐるのに反対して、台湾独立を企ててゐる。彼らは台湾人、と言っても高砂族ではなくもとは中国系なんですが、台湾人による台湾の統治を目標にして、ずいぶん前からこの運動をやつてゐるんです。その二代目大統領がこのあひだ病気で亡くなつて、副大統領が昇格するわけです。ルーズベルトのときのトルーマンみたいにね。ケネディのときのジョンソンと言つてもいいけれど」

「ぢやあ、無い国の大統領ですわね」

その無邪気でしかも冷酷な言ひまはしに画商は思はず苦笑して、

「それはまあ、無いと言へばたしかに無いけれど、でも、頭のなかには在るわけですね。心のなかにいふか。地図の上には無い。将来ひよつとするとその国の領土になるかもしれない土地は、芋みたいな恰好で描いてあるけれど。どの年鑑を見たつて、そんな共和国のこと、載つてない。でも、心のなかには熱烈に在る……」

「さうなのね、心のなかの国……」

とつぶやいてから、朝子はちよつと考へて、

「つまり梨田さんはシンパ？」

「いや、彼らの心のなかに在るんですよ、その国は。ぼくの心のなかはともかく。ぼくは別にこの運動を支援してるわけぢやありませんが、何しろ友達が大統領になつたんですから、ひとことお祝ひを言はないと義理が悪い。いい奴でしてね。ちよつとつきあつて下さい」

「でも……」

「台湾旅行をなさる障りにはなりませんよ。大丈夫。蔣経国の政府は妙にさばけてましてね、彼らとつきあつてる日本人を毛嫌ひしませんから。わたしも前にゆきましたし、ほかにも行つた連中がゐます」

「いいえ、さうぢやなくて。そんな正式の席にこんな服で……」

「心配いりません。ぼくの服装よりずつといいぢやありませんか。就任式はもうすんでしまつて、平服のパーティなんですよ。亡命政権がタキシードにイヴニング・ドレスなんて宴会をするはず、ないでせう。そんな宴会をするやうぢや、見込みはないし。何しろ、みんな苦勞して働いてるんで

すから。新大統領は、スーパーマーケットと連れ込み宿の経営者です。大臣は、パチンコ屋だったり、ラーメン屋だったり……」

「でも……」

ともぢもぢしてから朝子は言つた。

「さういふまじめな人たちの席に、ひやかし半分で出るなんて」

「なるほど、さう言はれるとぼくも恥ぢ入るけど、しかし彼ら喜びますよ。何しろ孤立無援ですからね。台北の政府はもちろん、北京の政府も敵だし。日本にもアメリカにも見捨てられてゐるし。関心を示されるだけでも嬉しいんです。せいぜい四十人くらいの寂しい会ですから、あなたのやうなきれいな人が出ると景気がつく」

「そんなうまいことおつしやつても……」

「それとも、何か政治的信条に反することになりますか？ たとへば……毛沢東主義を信奉してゐるとか」

と微笑して訊ねた男に、女も同じやうな表情で答へた。

「いいえ」

「ぢやあ、つきあひなさい。いいぢやありませんか。この機会をのがすと、一生、大統領就任パーティに出ることができませんよ。日本は当分、共和国になりさうもない」

そのきつい冗談に朝子は笑ひ出してしまつて、つまり花やかな笑ひ声が承諾のしるしになった。闇の色はずいぶん濃くなつてゐた。もうほとんど夜空と言つていい空の下で、タクシーが来るのを待ちながら、画商は、

「お酒を飲まなくちやならないから、車で来なかつたんですが、かうなるとやはり不便だな」